

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：45404

研究種目：基盤（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520287

研究課題名（和文）アメリカスの中のチカーノ文学とカリブ海文学

研究課題名（英文）Chicano Literature and Caribbean Literature in the Americas

研究代表者

水野敦子（MIZUNO ATSUKO）

山陽女子短期大学・人間生活学科・教授

研究者番号：60249571

研究成果の概要（和文）：

本研究では、チカーノ文学とカリブ海文学を代表する、アメリカ南西部のルドルフォ・アナーヤ(1937-)、及びマルチニックのエドゥアール・グリッサン（1928 - 2011）とパトリック・シャモアゾー（1953 - ）を中心に、南北アメリカ大陸を視野に入れたアメリカスの視点から両地域の文学を考察し、アメリカ合州国の真のあるべき姿を追求した。彼らの文学における、土地や身体との神秘的関係をもつ想像力、共同体意識やエコロジカルな思想は、ナショナリズムを超えて、他者との連帯の想像力に行き着いている。

研究成果の概要（英文）：

In this research project, I examined the Chicano writer, Rudolfo Anaya (1937-present) and Martinique writers, Eduard Glissant (1928-2011) and Patrick Chamoiseau (1953-present) from the Americas' point of view which brings North and South Americas into perspective and tried to review what the United States of America should be. Their literatures started from nationalism against colonial rules, and have got a world perception. I believe it is the key to today's many problems under the postcolonial situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカス、チカーノ文学、カリブ海文学、ルドルフォ・アナーヤ、エドゥアール・グリッサン、パトリック・シャモアゾー

1. 研究開始当初の背景

本研究は、アメリカ文化の中で周縁的な存在である合州国南西部とカリブ海地域がアメリカ合州国と接触する境界領域として注目され、植民地空間を往来した人々の歴史的

脈絡からアメリカ文化を捉え直そうとする研究が進められている中で、アメリカ南西部とカリブ海の両地域を視野に入れたアメリカスの視点からチカーノ文学とカリブ海文学を考察するという動機から始められた。

アメリカ合州国と、合州国を歴史的・文化

的に取り巻く北米、中米、南米、カリブ海地域を含むアメリカ諸国とを対比することによって、アメリカ合州国の〈真〉のあるべき姿を浮上させることができるのではないかと考えたのである。ポール・ギルロイやポール・ジャイルズなどのトランス・ナショナルな文学研究の手法も、本課題研究のテーマ設定の上で参考になった。

研究に着手した当時、チカーノ社会内部の父権制のイデオロギーを告発したチカーナ・フェミニズムの作家や、ジャメイカ・キンケイドなどアメリカで活躍するカリブ海出身の女性作家の研究が国内外で活発であった。チカーノやカリブ海地域特有の父権制社会を背景に、チカーノ（ナ）文学とカリブ海文学には女性作家が多く、そうした女性作家を研究する研究者が多いが、敢えて男性作家を研究対象とした。

応募者はアナーヤについて、メキシコ性の視点から研究を行い、論文を発表していた。アナーヤは、「我々は、アメリカスについての人間の問題に対して、人間的な回答を求めるリーダーにならなければならない」（“Aztlán: A Homeland Without Boundaries”）と述べているように、彼は南北アメリカ大陸を視野に入れて弱者の連帯を訴える作家であった。

グリッサンもまた、『アンティル論』のなかで、ヨーロッパではなく、アメリカスに接続して自らのアイデンティティを求めようとする姿勢を示している。彼は『関係の詩学』で、世界のあらゆる場所や人との関係性を訴えており、アナーヤとグリッサンの共通性に注目した。

グリッサンはフランス語圏の作家で、これまでアメリカ研究者は殆ど取り上げることのない作家であった。しかし、マルチニックは、ポストコロニアル研究にとって極めて重要な作家であるフランツ・ファノンを始め、エメ・セゼールなど多くの傑出した文学者や思想家が輩出し、カリブ海文学を研究する上で、マルチニックの作家研究は避けて通れないものであると思った。また、シャモアゾーは、グリッサンの思想に共鳴した作家で、マルチニック文学の正当な継承者とされている。グリッサンの思想をさらに発展させた彼は多くの文学賞を受賞し、文学的評価も高いことから、彼を研究対象に加えた。

こうして、アメリカ南西部とカリブ海地域を視野に入れて、両文学を再定義したいと研究に着手した。

2. 研究の目的

(1) 植民地支配のなかで歴史と文化と言語と土地を失いディアスポラな状態になった

チカーノとカリブ海地域の文学はいかにアイデンティティを獲得したか、あるいは従来のアイデンティティ意識を克服し、新しい意識を形成したかを、場と風景にも着目しながら考察する。

(2) アメリカ南西部もカリブ海も、世界最初のグローバリズムの場所となった政治的経済的社会的人類学的ダイナミックな場所で、不断の混淆や変容を起こしているが、これらの地域は、アメリカ合州国及びグローバルな現代社会にとって、いかなるモデルとなりうるか。

3. 研究の方法

(1) アナーヤ、グリッサン、シャモアゾーの作品と研究書を精読して、比較検討する。その他、チカーノ・カリブ海・南アメリカ文学の主要作品に当たり、アメリカスの文学の傾向や状況を把握する。

(2) アメリカ南西部とカリブ海の歴史文化に関する文献や研究書、特にポストコロニアル関係の研究書を精読し、作品の歴史的文化的背景についての知識を深める。

(3) ニューメキシコの大学図書館や歴史資料館で文献や資料を収集し、国内では入手困難な資料や情報を収集し、分析する。

4. 研究成果

(1) 主たる成果

本研究では、スペインの「黒い伝説」の正体を明らかにすることから始めた。スペインの「黒い伝説」は、大航海時代の先陣をきって新大陸に進出したカトリック国スペインに対する、新興プロテスタント国イギリスなどがスペインの非近代性を照射し、言いたてるための戦略的言説であった。こうしたスペインの「非近代性」言説は、スペインが植民地支配したチカーノやカリブ海への視座にも継承され、それがアメリカによるチカーノ及びカリブ海に対する蔑視に繋がっている。

新世界における植民地化の中、アメリカ南西部とカリブ海は、自らのディアスポラ意識や雑種性故にアイデンティティ獲得に苦闘し、それがチカーノ・カリブ海両文学創造の原動力の一つとなっている。

両地域は、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、アメリカ先住民などの多民族多人種が共生し、人的・物的交流がなされた場所でもあった。こうした歴史的背景から生まれたチカーノ文学とカリブ海文学は、地球的規模の関係

性を探る世界の見方を形成して新たな文学を創造し、ポスト・エスニシティ、ポスト・ナショナリズム、ポスト・コロニアリズムを考察する場として世界文学の中で重要な役割を果たしている。

①アナーヤ、グリッサン、シャモワゾーの文学的想像力の共通性と違いを明らかにした。

応募者がまず取り組んだのは、アナーヤの主要な作品である四季四部作（『シアの夏』、『リオ・グランデの秋』、『シャーマンの冬』、『ヘメスの春』）に注目し、アナーヤ、グリッサン、シャモワゾーの四季の捉え方を比較検討することであった。この四季四部作では、主人公探偵は共同体の平和を守るために悪党を追って四季を巡って冒険し、最後に恋人のもとに帰還して春を迎える。

四季は太陽の動きであり、太陽信仰のアストラン神話を響かせているが、アナーヤの四季への憧憬は、アストランの神話世界への切離感から生まれたものである。この作品群でアナーヤが訴えているのは、四季の中で慎ましく生きる幸せであり、これは主流ナラティヴに対するカウンター・ナラティヴとなっている。ジョン・バニヤンの『天路歷程』やベンジャミン・フランクリンの『自伝』では、太陽と光のイメージが拡張主義と結びついて世俗化していきっており、アナーヤの四季の言説は欧米の拡張言説と対照をなしている。

また、カリブには雨季と乾季の二つの季節しかないが、カリブの人たちも西欧的四季とは全く違う尺度で生きている。そうしたカリブの季節感が端的に表れているのがシャモワゾーの自伝的作品『幼い頃のむかし』である。この作品では、生の多様さに応じた雑多な〈季節〉が命名され、そうした季節は西欧の四季の範疇に分類できないリアルなものである。

このように、四季の捉え方の違いから西欧的世界観との違いを明らかにし、さらに、アイデンティティと連帯意識についても明らかにした。

アナーヤがアイデンティティの拠り所に行っているのはアストラン神話である。彼は、バリオなど新しく境界を作られた場所でもそ者意識を持って生きるチカーノに太陽の道を歩む者としての尊厳を与えようとした。そのために、彼はアストラン神話を使い、マジック・リアリズムの手法で神話世界と現代世界を結んでいる。

しかし、アナーヤは、偏狭な自民族中心主義に陥ることなく、植民者であるアングロ・アメリカンとの協調を求めると共に、貧困に苦しむアメリカの「裏庭」の人たちへの援助を訴えるヒューマニスティックな作家である。こうした彼の文学の特徴は、「エスニシティの限界を超えて、境界なき世界を創造し

なければいけない」（“Aztlán: A Homeland Without Boundaries”）という彼自身の言葉に表れている。

一方、奴隷交易でカリブ海に連れてこられ、異郷での非土着性の中に生きるカリブ海の人々は宗主国との関係で、それぞれ様々な事情を抱えている。グリッサンとシャモワゾーの場合は、フランスの海外県として政治的経済的文化的に自立できないマルティニックの現実を見据えており、両者はアイデンティティそのものに対しても全く新しい考え方を提示している。

グリッサンは「根の喪失がアイデンティティをもたらしえる」（『〈関係〉の詩学』）と主張している。さらに、シャモワゾーになると、塚本昌則氏も指摘しているように、アイデンティティという概念そのものに疑問を呈し、その軛を打ち破って、より広い世界へと接続しようとしている。

グリッサンとシャモワゾーも、アナーヤ同様に、世界への連帯へと想像力を繋ぐ。グリッサンは、「野蛮な貧困や、収奪や、飢餓や、虐殺によって、死んでいった人々」を思い、同じように苦悩の〈叫び声〉を挙げる世界の「共有場」（『〈関係〉の詩学』）へと思いを広げる。彼の世界との連帯感、マングローブや火山や砂浜などカリブの風景から醸し出されている。

シャモワゾーの最新作『カリブ海偽典』は、一人の老人が反植民地主義の戦いのために世界を股にかけるという物語で、ここにも世界との連帯が語られている。しかし、その語りは、反植民地主義の戦いというよりも、女性を巡る物語となっており、恋人との逢瀬による春の到来で四季四部作を締めくくったアナーヤとの類似性がみられる。ここには、大きな物語よりも小さな物語を大切にするアナーヤとシャモワゾーの共通性が窺える。

アナーヤ、グリッサン、シャモワゾーは、言語と文化と歴史を奪われたからこそ、複数のヴィジョンと意識を獲得することができ、国境を越えた連帯感を持つことができた。しかし、アイデンティティの問題に関しては、三者の間には違いがある。

②チカーノ文学とカリブ海文学がアメリカ合衆国及び現代社会に与える現代的意味を明らかにした。

アナーヤ、グリッサン、シャモワゾーは、多文化が集う場で鍛えられ、トランスナショナルな想像力で世界の連帯を訴え、マジック・リアリズムや様々な語りの手法を使って土地との関係を再構築している。彼らの新しい関係性の構築、移動する視点は、正統性や所有や所属や進歩といった観念に縛られ閉塞感がある合衆国／西欧近代の問題を解決する糸口となり、新たな希望を与える。

③両文学における神話や民話の機能を明らかにした。

アメリカ南西部とカリブの民話は、彼らが土地との関係性をもつのに重要な役割をしている。チカーノやカリブ海の人々は、支配者との葛藤のなかで土地や身体との神秘的関係をもつ想像力を有しているが、そうした神秘的関係を取り結ぶのが民話の役割である。アナーヤ文学に登場する飛ぶ男の民話と、カリブ海のスクリヤンの民話にもチカーノ文学とカリブ海文学の共通した想像力があり、彼らの物語と価値観の類似性を明らかにした。

(2) 成果の国内外における位置づけ

チカーノ文学とカリブ海文学という単独で論じられることが多い両文学を対比し、アメリカスの視点から体系化することができた。こうした論考は、日本は言うまでもなく、海外でも少ない。

(3) 今後の展望

チカーノ文学とカリブ海文学の基盤となっているチカーノ及びカリブ海の民話についての研究がまだ不十分であり、両文学における民話の役割と現代的意味についての研究を継続して行う。比較文化論的論考を展開して、国の近代化と周辺部との関係を問い直したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Atsuko, Mizuno. "The Four Seasons in Literatures of the Americas: Anaya, Glissant, and Chamoiseau" (『山陽女子短期大学紀要』第34巻(2012):44-58. (査読無))

② 水野敦子 「チカーノの自然観とマジカルリアリズム——チカーノ作家アナーヤを中心に」『エコクリティシズム・レビュー』No. 5(2012):30-35. (査読有)

[学会発表] (計3件)

① Atsuko, Mizuno. "The Four Seasons in Literatures of the Americas: Anaya, Glissant, and Chamoiseau" (第1回世界エコクリティシズム会議、2012年8月、於ブラジル・国立パライバ大学)

② 水野敦子 「マジカルリアリズムとチカーノの自然観」(エコクリティシズム研究会シンポジウム、2011年8月8日、於広島大学)

③ 水野敦子 「現代カリブ海女性作家のガーデン表象」(エコクリティシズム研究会ワークショップ、2010年8月9日、於広島大学)

[図書] (計2件)

① 水野敦子 「太陽の道とマジック・リアリズム——アナーヤの越境とポストコロニアリズム」『カウンター・ナラティブから読むアメリカ文学』新田玲子編 音羽書房鶴見書店、2012年、pp. 210-223.

② 水野敦子 『オルタナティブ・ヴォイスを聴く』伊藤詔子・水野敦子他編 音羽書房鶴見書店、2011年、p. 120, pp. 139-142, p. 183, pp. 321-24.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水野敦子 (MIZUNO ATSUKO)

山陽女子短期大学・人間生活学科・教授

研究者番号：60249571